



一人一人が集中してあそべる環境

保育室に統一感を出すために布を使い、温かい家庭的な雰囲気にし、子どもの動線を考慮した静と動の空間を作っています。

また、外のスペースも体を動かすスペースに使っています。

身体運動を楽しむコーナー



体を動かしてあそべるように、広いスペースに玩具を設置。



1歳児クラスは2階にあるので、外あそびをするために、テラスに人工芝を敷いている。天候や子どもの体調に合わせて使用している。

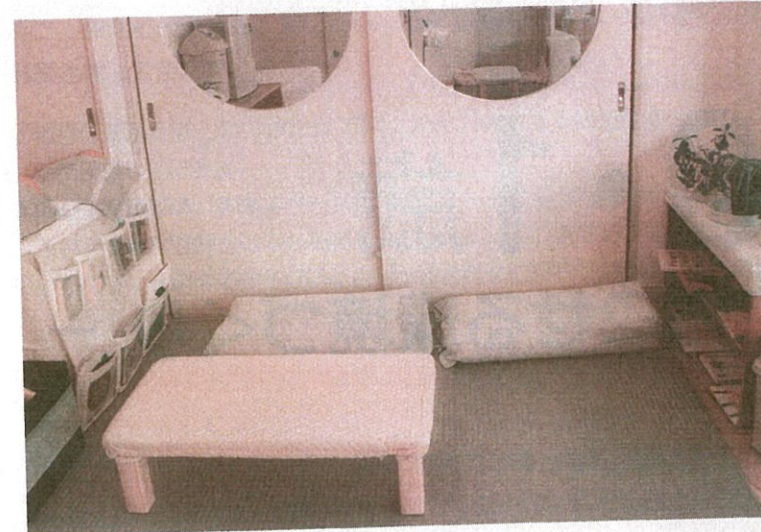
落ち着いてあそべるコーナー



すっきりと仕切ったあそびコーナーと休息コーナー。イレクターにかぶせた布は取り外し可能なので、洗濯もでき、衛生的。



棚で仕切られ、落ち着いて楽しめるコーナー。ブロックを持ちこんで、じっくりあそぶ。



ごろんと横になっても読めるクッションのある絵本コーナー。

子どもの目の高さに合わせた取り出しやすい絵本ラック。表紙を見せ、子どもが選びやすいように工夫して並べてある。

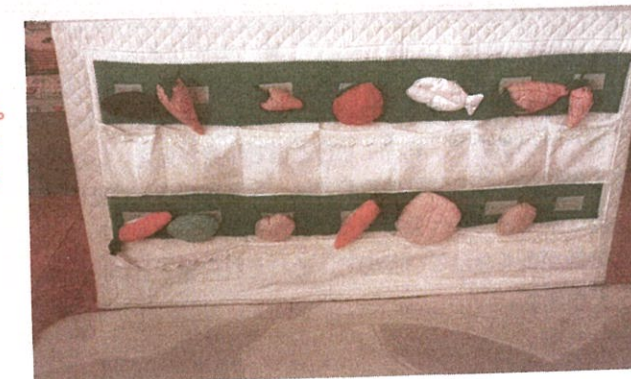


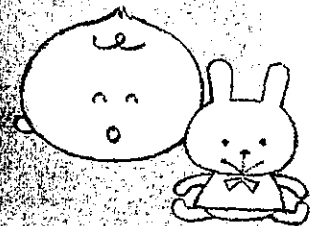
絵本棚の横には、すぐに座って見られるようにソファを設置。



感触を楽しめるように

ロッカーの裏側を利用した手作り玩具。面テープがはってあるので、食べ物にくっつけたりはがしたりして、布の感触を楽しみながらあそべる。





0・1歳

— 安心して過ごせる環境づくり —

0歳児や1歳児の保育環境づくりのポイント

0歳児や1歳児は、親に代わる特定の保育者に依存しながら園生活に慣れていく時期です。ちょうど特定の人との信頼関係が形成されて、その人がいなくなると不安になる時期、言い換えると人見知りが始まる時期には、特定の保育者の後追いをするようになります。でも、その保育者の姿が見えやすい保育環境になっていれば、安心して目で後追いができます。そんな環境の工夫を、どのようにしているかをまとめてみましょう。

- ①赤目保育所では、0・1歳児の保育室を、「集ってあそぶスペース」「個々にあそぶ運動のスペース」「食事などの集いのスペース」「着替えのスペース」に分けて、環境づくりをしています。これらの中にあそび空間は、明るく広い空間として区分されていて、仕切られていますが、互いの様子が見えるようになっています。
- ②関町保育園では1歳児が生活しているので、互いにじゃましないように、低い棚で空間を仕切るように工夫していて、1歳児の目線からでも、ひと目で保育室の中が見渡せるような高さで空間を構成しています。そのために保育者がどこにいるかもわかりますし、物の取り合いが増える1歳から2歳児にかけても、互いのあそびに侵入しないで安心して過ごせるようになっています。

0歳児や1歳児の保育環境づくりのポイント

0歳児や1歳児でも、いつも保育者ばかりを見ているわけではありません。周りの子どもたちのしていることを見ていて、次第にそれを自分の中に取り込んでいくようになります。そのためには、周りの子どもたちの姿を見られることも大事になってきます。

- ①赤目保育所では、南側の明るく広いあそびの広場の周りに、低い棚で絵本コーナーや遊具コーナーを作っていて、乳児にとっては見やすく、しかも使いやすくなっています。また遊具入れも、棚の中の箱が低くなっているので、乳児にもひと目で中身が見え、しかも取り出しやすくなっています。
- ②1歳児が中心の関町保育園では、保育室の空間が低い棚で細かく区分けされていて、どの空間でどんなあそびができるかが見やすく、しかもあそびが混ざらないように遊具が区分して置いてあります。さらにその数が多くなっているので、それぞれの場で互いに好きなあそびをじゃまされずに没頭して楽しむことができます。

1歳児の保育環境づくりのポイント

1歳児になると、保育者と追いかけてこやかくれんぼなどを楽しむことが多くなります。そのために、保育室の環境も、追いかけてをやる広い場や、隠れることのできる狭い場所や空間などが必要となってきます。

- ①赤目保育所では、滑り台を上り下りしたり、その周りを走り回ったりして、追いかけることを楽しめるように配慮しています。
- ②関町保育園では、休息スペースに、狭くて入れるような空間をつくっておき、休息する場と同時に、隠られるような空間としても利用できるようにしています。また、それぞれにあそび場が細かく仕切られているので、その中であそび込むとじゃまされずに隠れているような時間として楽しめることとなります。

0歳から1歳児にかけての保育環境づくりのポイント

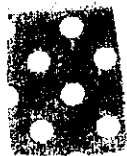
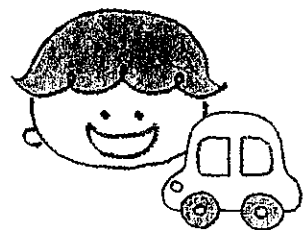
0歳から1歳児にかけては、親から離れているときに、親の代わりになって心を支えていく遊具(移行対象)が必要となる子がいます。こうした心のよりどころとなる遊具を、どう保障するかということも、大事な環境構成となります。

- ①人形や電車を入れる棚やかごが決めてあり、また、それらを用いてじっくりあそべる場を決めておくことで、ゆっくりと楽しむことができます。多くの園では、これらを一緒に混ぜて置いておくことや1つの場で一緒にあそぶようにしていますが、それだと数が少ないと取り合いになったりします。まだ1歳児では取り合っても、なかなか調整することはできません。でも、こうして空間を別々にしておき、遊具の種類ごとにあそび場を分けておくと、取り合うことは少なくなります。
- ②また人形の棚の裏には、自分の人形をしまっておける場がありました。その配慮によって、マイ人形を決めておくことができるようになり、取られる心配がなくなるので、毎日安心して過ごせるようになります。

1歳児の保育環境づくりのポイント

歩き始めた1歳児は、まだ疲れやすいので、くつろげる場が必要になります。こうした場を、無理なく作っていけるようになるとよいですね。その作り方については、次のような工夫がされました。

- ①赤目保育所では、床の上にじゅうたんを敷き詰めていました。さらにその上に布団を敷いて、小さい子どもたちがごろごろできる場を作っていました。こうした環境があると、子どもたちは必要なときに、その部屋に入ってくつろぐことができます。
- ②関町保育園では、保育室全体にじゅうたんを敷いてあるので、子どもたちはいつでも必要なときに、ごろごろすることが可能です。さらに、絵本コーナーなどであそぶときには、くつろげるような柔らかなクッションや手作りのいすなどが用意されています。



自分の世界づくりを 楽しめるように

自我が芽生えて、互いに自己主張が強くなる

2歳児の精神世界の特徴は、何と言っても自我の芽生えという現象です。これは、それまで親に保護されていたために親と一体化していた乳児が、次第に離れて過ごせるようになって、それまでの親に守られて親と同一の世界で過ごしていた殻を破り、自分中心の世界づくりを始めることを意味しています。

その具体的な現象としては、親などの大人の指示や言うことを聞かなくなる、自分の好きな服や食べ物を主張するようになる、大人の嫌がることをわざとするなど行動が見られるようになります。

親としては、それまで言うことを聞くよい子だったのに、なぜこんなにわがままになったのか、しつけが甘すぎたのかと悩むことも多くなります。そのために、1歳前後の夜泣きや人見知りが強くなる時期とともに、この2歳過ぎの自己主張の強まりの時期は、虐待が多くなる時でもあるのです。

手先がよく動くようになり、組み立てたり作ったりすることが得意になる

1歳児がどちらかというと、歩いたり上り下りしたりする全身運動を楽しむ時期であったのに比べると、2・3歳児のこの時期は、手先の運動が著しく発達していく時期です。

こうした手先の巧緻性の発達には、生活習慣ではスプーンやフォークの操作がうまくなることや、服の着替えが上手になることを意味しています。また、あそびでいうと積み木やパズル、ブロックなどの操作が上手になっていくことを意味しています。そのために、保育室に手先を使って構成したり、操作したりする遊具が備えてあることが大事になります。

しかし、まだ2・3歳児では、遊具や場を交代で使用するということは難しいのです。そのために、こうした遊具の数が問われることになります。数が少ないと当然取り合いになりますが、話し合っで決めることや、交代で使用するよう決めることは、まだ難しいでしょう。取り合わなくてもすむような、個数がほしくなるのは当然といえます。

探求心が強くなり、入れたり隠したり切ったりすることを好む

自由に行動でき、いろいろな物を操作できる3歳児は、探求心が旺盛です。保育室だけでは満足できず、園庭に出て砂場や固定遊具、築山や園舎の裏など、さまざまな場所に探検に出かけていきます。特に人気があるのは、ダンゴムシなどの虫探しです。多くの園では、2・3歳児が、園庭のあちこちを巡ってダンゴムシ探しをしている光景が見られます。

ときには散歩の途中で、マンホールの小さな穴を見つけると、石をたくさん拾ってきて、その穴に入れて落としてみることを楽しんだりします。また引き出しの中に、園庭で拾ってきたものを何でも入れておくこともあります。こうしたあそびを楽しむ姿は、さながら研究を楽しんでいる学者のようであり、自分で立てた仮説（このくらい大きさなら入る）を、自分で検証して楽しんでいるような雰囲気です。

さらに、こうした探求心の強い子どもたちの中には、なんでも拾ったり、捕まえた虫をポケットに入れたまま忘れてしまったりすることがあります。そこで、こうして探したものを入れるバッグや、持ち運びのしやすい容器が必要になることもあります。このような探索しやすい配慮をすることも、環境として意味をもつこととなります。

いろいろな物を、乗り物や食べ物などに見立てることが大好き

2歳を過ぎるころになると、子どもたちの精神的な発達に次の特徴が表れてきます。それは物を象徴的に見立てられるようになることです。それまで、物はあくまでもその物としてしか見られなかったのに、このころから、例えば、積み木を電車や自動車に見立てるなど、その物をほかの物に見立てることができるようになります。

そうした見立てあそびが始まると、その周りの子どもたちのあそびは一気に楽しいものになります。ある子が粘土の形を、パンやケーキに見立てると、一斉に粘土を用いたパンづくりやクッキーづくり、ケーキづくりなどが始まります。そんなときには、粘土が足りなくなるとか、ケーキの皿が足りるだろうかとか、環境づくりにも人数を配慮することが必要になっていきます。

また中型の積み木を組み合わせて座り、ある子が乗り物に見立てると、みんなそうした積み木を乗り物に見立てるあそびをしたくなります。しかし多くの場合、室内の積み木には限りがあるので、取り合いが始まります。そのために、積み木以外の物でも乗り物に見立てられるものを用意しておくなどの配慮も必要になってきます。

なり切ることが好きで、ごっこあそびに没頭する

2・3歳児の多くはヒーローやヒロインに憧れる時期でもあります。テレビ番組やビデオで見ているヒーローに憧れて、お面をかぶったり、同じような服装をしたり、同じ武器に見立てた小物を身につけたりして、ヒーローになり切って過ごします。

こうしたなり切りあそびは、見立てあそびに比べると、自分自身をヒーローに見立てているということができるでしょう。そのために、ヒーローや憧れの人（シェフ、ウェイトレス、医者、看護師など）と同じような服装をしたり、同じような小物を身につけたりすることが必要になってきます。こうした服装や小物をどのようにして用意しておくか、それは個人の物にするのか、クラスの物として共有するのか、さらにはなり切る場をどのように設定しておくのかなどの環境づくりの問題も生じてきます。



友達とのかかわりやあそびが広がる環境

ゲームコーナーの棚。子どもの目線で、ゲームやパズルの種類がわかりやすいように、平積みにしてある。



ブロックコーナーの棚。種類ごとにかごに分け、小さいものはプラスチック容器に入れて取り出しやすくしている。



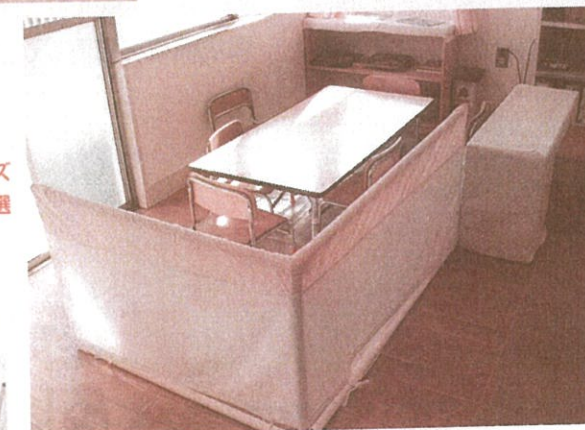
棚にはキルティングのカバーを付けて、整理するだけでなく、安全面にも配慮してある。

落ち着いてあそべるコーナー



ままごとコーナー。清潔感のあるかわいい布の仕切り。軽い仕切りなので、人数によって広げて使える。

落ち着けるスペース。ゲーム・パズルコーナー。自分の好きなものを選んで、じっくりあそぶ。



食事スペースは、机上あそびコーナーとして共有できる。机の近くに素材を設置。

自然光を取り入れた、明るい絵本コーナー。棚の絵本は表紙を見せて、子どもたちが選びやすいように設置。



第3章

2・3歳児が
生き生き育つ
保育環境づくり



第4節

幼稚園
3歳児クラスでの実践

安心して園生活を過ごせる 環境づくり

幼稚園を好きになってほしい！

指導

松阪市立豊地幼稚園

平成13年から3歳児保育を行うようになった豊地幼稚園では、3歳児だからこそ押さえておきたい保育室の環境構成について研修を続けてきました。どのようなことをポイントとして考えてきたのでしょうか。

「園って楽しい！」と 思ってもらえることが願い

3年保育の幼稚園に入園してくる子どもたちにとっては、集団生活も、保護者から離れるのも初めての経験。入園当初は、不安と緊張でいっぱいです。園では、自分の創意工夫を存分に発揮して、生き生きとあそんだり生活したりしてほしいのですが、まずは「幼稚園って、楽しい！」「いろいろなあそびが楽しめる」と感じて、毎日の登園を楽しみにするようになってほしいという願いを込めて、子どもの視点に立った保育環境を目指しています。

子どもが園に慣れてきて、自分であそびを見つけられるようになってくると、少しずつ保育室の環境を変えていく必要はありますが、大きく分けて、8つのポイントで考えています。

Point 1 安心できる

初めは保護者から離れて不安を感じている子どもが多いので、パーティションなどを低めにし、入り口から保育室全体を見渡せるように配慮しました。これによって子どもたちが保育室のどこにいても、保育者が視界に入っ
て、「先生が見てくれる」という安心感が生まれます。夏が過ぎたころ、子どもたちが落ち着いて自分の好きなあそびに取り組めるようになってきたら、保育者もあそびの輪に加わりながら、子どもたちとの関係をどんどん深めていくことができます。



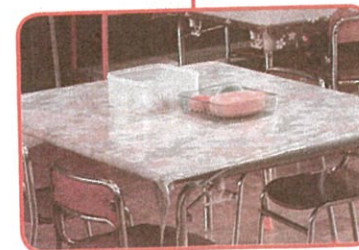
お絵かき



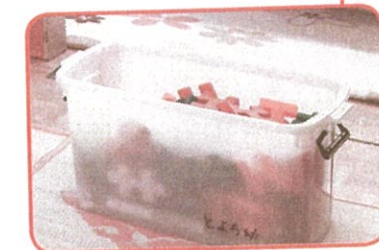
絵本



ままごと



粘土



ブロック

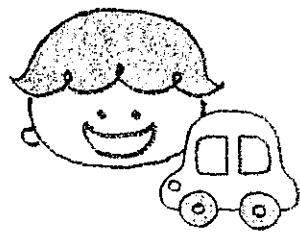
部屋の中央を開けた感じに構成しているため、入り口からすべてのあそびが見渡せる。

第3章

2・3歳児が
生き生き育つ
保育環境づくり



実践から
見えてきた
ポイント



2・3歳

— 自分の世界づくりを楽しめるように —

2歳児を過ぎるころから自我が芽生えてきて、自分を主張するようになります。場の取り合いや、遊具の取り合いも頻繁に起こるようになります。そのために、場の広さや物の数などを調整しやすい環境づくりが求められます。さらに、あそびの内容も見立てたり、なり切ったりすることが増えていくので、それに合った場づくりをすることや、遊具の準備も必要になっていきます。園内研でこうした環境づくりについて話し合い、充実したあそびが展開されている園の取り組みについて、ポイントをまとめてみます。



2・3歳児は自分で使いたいものを自分で探すようになります。そのときに、どこにあるのかわかりにくいと、箱ごとひっくり返してしまい、遊具や素材があたり一面に散らばってしまうこともよく起こります。そういうことがある場合には、しかるよりも探しやすい環境にしていける方がよいと思います。関町保育園の2歳児の保育室や、あいじつ子ども園の2歳児の保育室には次のような工夫がされています。

- ①素材や遊具は、どの棚に何を置いておくかを決めてあるので、子どもたちが探しやすいです。しかも、その棚には、分類してわかりやすく並べたかごの中に、素材や遊具が見やすく入っています。これならいちいちかごを全部空けなくても、必要な物を取り出すことができます。
- ②ブロックやレールのように、すぐに使いたい遊具は大きなかごに入れて出しておいたり、棚の一番下の段に並べておいて、そのままかごと出せるようにしたりしています。こうした配慮によって、たくさんの子どもたちが一度に出そうとしても、混乱なく遊具を出せるようになります。



2・3歳児は、手先の巧緻性が発達していく時期であり、手先を使うあそびが大好きです。積み木やブロックあそび、いろいろな素材を穴や容器に入れるあそびなどを繰り返し楽しめます。そのためには、どのような環境が大事になってくるのかをまとめてみます。

- ①関町保育園の遊具棚には、パズルのコーナーとさまざまな容器に素材を入れてあそぶ遊具のコーナーが用意してあります。パズルは部分をつなげて全体を構成していく知的なあそびでもあるのですが、その過程で板をはめたり外したりするので、指先の巧緻性の発達を促すことにもなります。また、いろいろな容器に素材を入れて音などを楽しむあそびでは、容器のせんをひねるという巧緻性の発達を促しています。
- ②あいじつ子ども園は、製作コーナーが充実しています。いろいろな素材を切ったりはったり、折ったりしながら、さまざまな小道具や形をつくっていきます。また人数が増えたときには、テーブルを増やししながら、それぞれの作り方を楽しめるような配慮もされています。
- ③豊地幼稚園の3歳児クラスも、ブロックコーナーが設定されていて、人数に応じてみんなで取り組めるような配慮がされていました。またお絵かきなど、手先を用いてかける場も用意されていて、クレヨンも使いやすいように置かれています。



N保育園では、0歳から3歳までが園庭でいろいろな探索ができるような工夫がされていました。その特徴として以下の2つがあります。

- ①虫や花を探せるところ、登って楽しめるところ、砂で楽しめるところ、水辺の生き物にふれられるところ、水あそびを楽しめるところなどのように、場をゾーンに区切りながら、その場の目的がわかるような工夫をすることで、あそびに没頭できるようにしてあります。
- ②園庭が運動をする場と探索できる場に区分されているので、子どもたちが安心して自分たちで探索できるようになっています。しかも、園庭全体が見渡せるので、保育者もだれがどこにいるのかがひと目で把握できます。



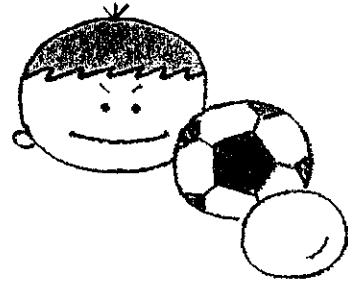
2・3歳児は、ものを何かに見立ててあそぶことが大好きです。そのために、見立てやすい遊具があると、取り合いにならずに楽しくあそべます。どんなものが見立てやすいのか、各園での工夫を見ていきます。

- ①あいじつ子ども園では、2・3歳児の各保育室に、牛乳パックで作った小型の手作りの積み木が置いてあります。それをいろいろな形に組み合わせて、子どもたちは乗り物やうち、さらにはベッドなどに見立ててあそんでいます。こんなすてきな手づくり積み木があると、何にでも見立てられそうです。
- ②豊地幼稚園では、カーテンのあるつい立てが大人気です。それを立てた内側に家に見立てることができ、カーテンを開けるとうちから外をながめているようです。また、そのカーテンを人形劇などの活躍の場にも見立てることができます。カーテンを開けると舞台になります。



3歳児になると、見立てるだけでなく、自分が何かになり切って楽しむこともよくあります。それを見ていきます。

- ①あいじつ子ども園では、ままとコーナーに手作りのつい立てがあり、必要に応じて、場所を広げたり狭めたりできるようにしています。
- ②豊地幼稚園では、手作りのレンジや冷蔵庫が置いてあり、それを使って子どもたちはままとあそびを楽しく展開していきます。



仲間とあそぶことを 楽しめるように

あそびに必要な場や小物を、自分たちで用意したり作ったりできる

4歳児ごろになると、友達と一緒に長い時間あそぶことができるようになります。2・3歳児のときに楽しんだ見立てやなり切りあそびの経験を基盤にして、ごっこあそびを展開するようになります。なり切りあそびとの違いは、それぞれが何かの役になり切りながら、そこに物語性を織りなしていけることです。

例えば、お店ごっこでは、単にシェフやウェイトレスになり切るだけでなく、いかにもレストランのようにメニュー表を作って客に見せ、注文を取り、それに合わせて料理を作り、食べた後は会計をしたりします。病院ごっこでは、看護師が検温をし、医師が診断をして、看護師が注射をしたりします。こうした客や患者とのやり取りも含めてのなり切りあそびであり、参加者がそれぞれの人物になり切ってストーリーを展開していく楽しさがあるのです。

こうしたストーリーが展開されるためには、見立て環境としての場や小物が必要になってきます。いかにもレストラン風の厨房やテーブル、いかにも病院風の診察室やベッドなどがある場が必要で、ガス台やフライパン、料理に見立てる素材や皿、ナイフ、フォーク、聴診器や注射なども必要な小物となるでしょう。

園庭で、みんなで集団でゲームや競争に取り組むことを楽しむ

4歳を過ぎると、園庭で友達と競い合うことが楽しくなってきます。園庭でだれかが縄跳びを始めると、同じように縄跳びに挑戦する子が増えていきます。サッカーごっこが始まると、そこに参加する子が増えていきます。このように、最初は一人とか二人で始めた挑戦が、次第に周りの子どもたちに広がり、やがてはグループやクラス単位のゲームや競争になっていくことはよくあることです。

この時期に、こうした集団活動に積極的に参加できることは、将来の社会生活の基礎的体験をするためにも必要なことなのです。そのために、こうした集団あそびをどのような場所で展開していくのか、人数の増減にどう対応していくのかなどの、保育環境づくりの必要性が問われてきます。

仲間と協力したり、挑戦したりするようになる

子どもたちが、園庭や室内において、集団でいろいろなイメージを出し合いながら展開していくあそびは、1日だけで終わるとは限りません。何日も、ときには何週間も継続して取り組むことがあります。こうした取り組みの中で、子どもたちはあそびの展開に必要な場を協力してつくり、ルールづくりを相談したりしていくのです。

言い換えると、年長児のときにこうした継続的なごっこあそびを展開していく中で、必要な場やルールを作る相談をしたり、役割を決めて任せたりするなどの、協同的な取り組み方を学んでいくともいえます。こうした協同性を身につけていくことは、小学校以降の生活で、当番を任せられることや、課題学習をグループやクラスで展開すること、さらには社会に出てから仕事をチームで進めていくことなどの基礎となる体験を積み重ねているともいえます。

集団でさまざまな表現活動を楽しむことができる

4・5歳になると、みんなで歌ったり踊ったりすることが楽しくなります。また簡単な楽器を演奏することや、簡単な劇を演ずることも楽しめるようになります。でも、こうした集団的な表現活動を楽しむ展開するためには、取り組む場所と使う教材が問われてきます。

いきなり舞台の上で練習させられれば、子どもたちは緊張して不安感に陥ることになるでしょう。最初のうちは、保育室の片隅などで、小人数で取り組むことがよいかもかもしれません。また、人数が増えたら、ホールの近くの広い場所に変えて取り組むと、年少児たちも見に来るかもしれません。

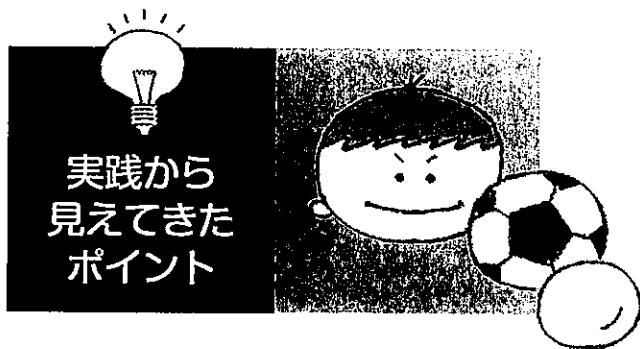
こうして、だんだんと見に来てもらえる場に移動しながら、使う楽器や小道具も本物にしていくことで、不安にならず、また緊張することもなく本番に備えることができます。

そして何よりも、こうした集団活動の体験が精神的に大事な意味をもちます。すなわち、それまでは自分なりに楽しんでいたことを人前で表現することにより、他者から評価されることに慣れる体験をしていくことになるのです。

長い話を聞いて理解できるようになる

こうした集団活動の体験は、話を聞くという活動でも積み重ねられていきます。4歳までは絵本や紙芝居を読んでもらう体験が中心でしたが、5歳になると絵を見ないで、話を聞いて物語を想像することが求められるようになります。こうした素話を理解する力は、話に集中できることと密接に関係しています。

そこで、先生の話や、集団でも集中して聞けるような環境が必要となってきます。保育室の中でも、配慮された空間であればそれは可能かもしれません。でも、お話の部屋やお話コーナーのような、ほかの遊具がなくて集中できる場所があれば、可能となります。こうした絵本コーナーとは異なる、話に集中できる場づくりも大事になるのです。



実践から
見えてきた
ポイント

4・5歳

— 仲間とあそぶことを楽しめるように —

4・5歳になると、子どもたちは自分たちで主体的に活動を展開することができます。しかし、場や遊具が主体的に使えるようになっていなければ、そうした成長していく姿は見られません。園内研に取り組む中で、園の環境を見直し、子どもたちが自分たちで積極的に活動に取り組み、成長していけるような工夫を、どのように実現したのかをまとめていくことにします。

1 仲間とじっくり取り組める場を築いていく

仲間と一緒にじっくり取り組むためには、周りから邪魔されない空間が必要になります。そのためには保育室や園庭の場を、どうやって閉じた空間にしていけるかという工夫が必要です。そうした工夫の仕方について、各園を見ていきましょう。

- ①ひばり幼稚園では、それまで倉庫代わりにしか使っていなかった廊下の奥を、物を片付けて明るくし、その通路の壁を明るく塗り直すなどの改装をしました。こうしてできた製作コーナーは、明るく閉じた空間になり、子どもたちの大好きな場になりました。
- ②芝保育園では、それまでの人工的な園庭を、園内研修で何度も見直していき、仲間とじっくり探索できる園庭作りをしていきました。その成果は、野草が増えて虫が集まり、それを探したり、自然物であそんだりしていく子どもたちの姿として実現していきました。
- ③米沢中央幼稚園では、あまり子どもが行きたがらなかった山の反対側を、井戸水が出るという自然を生かして改良し、仲間とじっくりあそべる川と池にしていきました。それは園内研修としても苦心しながら、子どもたちのあそぶ姿を見ては話し合っ改善していった成果でもありました。

2 友達と思い切り体を動かして遊ぶ場を築いていく

5歳児になると身体的にもいろいろな動きができるようになるので、さまざまなことに挑戦していきませう。縄跳びや竹馬、跳び箱やアスレチックなど、いろいろな挑戦できるあそびがありますが、もっとダイナミックに挑戦してほしいという願いで園内研に取り組んだ結果を見ていきましょう。

- ①芝保育園では、保育者と子どもたちだけでなく、保護者をも巻き込んで、築山づくりに取り組みました。その結果は写真にもあるように、異なる2つの築山として完成しました。そのうち一方は土で自由にあそべる山、もう一つは土を大事にする山として、子どもたちが使い分けてあそぶようになっていきました。
- ②米沢中央幼稚園では、園庭の隅にある森の木の活用について、園内研修で取り組みました。始めはターザンロープをつけてみましたが、それだけではすぐに飽きてしまいました。そこで、周りの木々も活用して、木々をロープで結んでいきました。すると忍者のように、そのロープを伝わって移動する修行の場になりました。また、園庭の固定遊具も同じように、アスレチックのようにつなげてあそべるような工夫をしました。その結果、これまで固定遊具に関心をもたなかった3歳児も挑戦するようになりました。

5歳児になると、いろいろな素材を用いて、さまざまな物を創り出すことができるようになります。既製品ばかりでなく、自分たちでもいろいろつくり出せる体験をすることは、とても大事な経験です。それができるようになるために、園内研を通してどのような工夫をしたかを見てみます。

- ①芝保育園では、築山の1つを泥あそびのできる場にしていきました。それが泥場です。写真にもあるように、子どもたちは土を使っていろいろなあそび方を楽しみ、さまざまな発見もしていきました。
- ②ひばり幼稚園では、テラスを積極的に活用するようにしました。テラスでは水あそびや汚れるあそびができます。たらいを置いて水で自由にあそんだり、絵の具であそんだりできるような場にしていきました。
- ③米沢中央幼稚園では、井戸水のポンプと小川のそばに、泥あそびができる場をつくりました。すると、子どもたちは、泥だんご作りに挑戦するようになりました。また、草や植物を採って集まりやすい園舎の一角に、染色体験のできる場をつくりました。5歳児が保育者と一緒に、染色でバンダナなどを作っている姿を見て、4歳児や3歳児も関心を持ちます。こうして毎年、染色体験は人気のある活動となっていきました。

5歳児になると、自分たちで取り組んでいる活動の合間に、仲間と少しゆったり過ごす時間を求めるようになります。こうした取り組みとくつろぎの活動リズムは、その活動を長く継続していくために必要な時間なのです。そこで、各園での取り組みの中で、こうした場づくりも見ていきます。

- ①ひばり幼稚園では、園庭の片隅にベンチを置くようにしました。以前は外あそびの用具を置いておいた場所を片付けて、ほっとできる場に改善しました。すると、子どもたちは、ここで語り合ったり、ひと息ついたりして、活動にリズムが生まれてきました。
- ②米沢中央幼稚園や芝保育園では、園庭に芝生の場所をつくって、自由に使えるようにしています。子どもたちは、疲れるとそこに寝転んだり、みんなで集まったりしてくつろいで、その後、またあそび出す姿が見られるようになりました。こうした静と動の活動リズムが生まれると、活動が長続きするようになります。



発達や生活の流れに応じた環境を作り出す

保育環境の見直しには、4つのポイントを置きました。

1. 子どもたちの自然な交流を生み出す場づくり

子どもたちが事物に興味・関心を持ち、働きかけたくなるきっかけには人との出会いが大きな影響を与えています。そこで、自然なあそびや意図的な活動の中で人と出会える場を構成することを考えました。子どもたちが集い、伝え合うことで気づきや発見、感動を共有したり、知識の確認をしたりするなど、互いに育ち合える場になるよう工夫しました。例えば、玄関横の空きスペースにテーブルと、棚にすり鉢やすりこぎ、まな板、ナイフなどを用意し、色水あそびなどさまざまな実験がいつでも行える「ふたば研究所」という場所を、5歳児クラスのアソビ場として継続的に用意しました。



ふたば研究所で実験をする5歳児。

2. 発達に応じたあそびの場の確保

個々のあそびを充実させたい3歳以前の時期には、大きい子どもたちのあそびボールが飛んでくるなどの危険がなく、あそびに集中できる場がほしくなります。そこで、園舎脇の畑を砂場に改修し、「つぼみガーデン」と名付けられた場を用意しました。ここでは、砂場あそびのほか、土を掘って虫を探

したり、種を集めたりなど、自然にふれながら、あそべるようになりました。



にここ池で、オタマジャクシをとる子どもたち。



3. 生活の流れに応じた環境

幼稚園の延長保育や0～3歳の保育園の子どもたちにとっては、家庭的なよりリラックスした空間が必要という配慮から、座ったり寝転んだりできるスペースを確保しました。

4. 五感を拓く場所「もりのみち」

子どもたちの感性を刺激することが、感じ、考え、実現していく力をはぐくんでいくと考え、園舎裏の道に、さまざまな色や大きさの違う石、砂、木材、レンガなどを敷き、足裏の感触を楽しめるようにし、草花を植えたりもして、五感をフルに使ってあそべる場を作りました。



さまざまな五感が刺激される「もりのみち」。



つぼみガーデンへ続く